

<吉田松陰の遺言に学ぶ>

=平成30年1月20日=

■吉田松陰の教え

・松下村塾など

吉田松陰は、松下村塾で身分に関係なく、志をもった人を塾生とし、わずか2年余の間におよそ90人を教えている。

「地を離れて人なく、人を離れて事なし、人事を究めんと欲せば先ず地理を見よ」

土地を離れて人々の生活は成り立たない、また、人を離れて物事が行われることもない。だから、まずその地域の自然の状態を念入りに見なければならぬ。

※吉田松陰自ら、旅をして現地を見る。海外までも行こうとした。

「飛耳長目」

諸方を遊歴する門生や友人知己から寄せられた情報を集め、新聞風につづっていた。萩から外に出たこともない者でも、京都や江戸、また、各地の情勢を詳しく知ることが出来た。情報の収集が大切だと分かる。

※現在においても、情報の入手が最も大切である。

「読書が大切」

松下村塾には、孟宗竹に漢詩を刻んだ聯（れん）というものがあり、次のように記されている。

自非読萬卷書 寧得為千秋人

(解説・万巻の書を読むに非らざるよりは、いづくんぞ千秋の人たるを得ん)

自非輕一己勞 寧得致兆民安

(解説・一己の労を軽んずるにあらざるよりは、いづくんぞ兆民の安きを致すを得ん)

言葉の意味は、多くの書物を読まないで、後世に名を残す人にはなれない。

自分ひとりの労力を惜しむようでは 多くの人を幸せにすることはできない、というもの。

吉田松陰は、亡くなる前の3年1ヶ月の間に1、460冊（1ヶ月約40冊）を読み、「野山獄読書記」として、全ての題名と、読んだ月日を書きとどめている。読み終わると「卒業」「了」と記した。『吉田松陰全集』（9巻）

「書を読みて己が感ずる所は、抄録しておくべし」

読書において感じたことは、記録しておくことが大切である。

※乃木希典の所蔵本には、朱色の傍線がたくさん入っている「手沢本^{しづたくほん}」という。

・遺言（留魂録）から 「志」で結ばれることが大切

吉田松陰は、安政6（1859）年10月27日、江戸伝馬町の獄で処刑された。その2日前の10月25日から書き始め、26日の夕刻にかけ、門下生への遺言『留魂録』を書きあげた。その13項目に「天下の事を成すは、天下有志の士と志を通ずるに非ざれば得ず」

という項目があり、身分に関係なく、志を同じくする者が集うことによって、目的をなすことができる、という教えが記されている。この教えは、身分社会を崩壊させる原点となった。のちに墓標も同じ型で設置され、形ともなって表現された。（例：桜山神社の墓標など）

『留魂録』は、2通作成された。この考え方をぜひとも門下生に伝えたいとする願いのあらわれである。同獄の囚人沼崎吉五郎に預けた1通は、明治7年に流罪の三宅島から東京へ帰り、明治9（1876）年、神奈川県令をしていた野村靖に渡され、萩へ帰ることになった。

※現在、松陰神社博物館：至誠館、の最奥“留魂の間”に展示されている。

■ 高杉晋作は、師の教えを行動に（上海渡航）

高杉晋作は、文久2（1862）年、長州藩を代表し、幕府の船で清国の上海に行く機会を得て渡海。半植民地化された上海で、外国軍艦の装備を見て、大砲や小銃など西洋の軍備は日本と比べ比較にならないほど進んでいることを確認した。早速、ピストル2挺を購入し持ち帰る。また、洋式軍備に取り掛かることをめざした。（帰国後、独断でオランダから蒸気船の購入契約を結んだが、実現しなかった）

この体験から、長州藩は洋式軍備を進め、幕府軍に対抗するほどの軍事力を持つほどになった。結果として幕長戦争においても勝利し、戊辰戦争においても勝利し、明治維新実現のための大きな力となった。

※洋式軍備の資金は、有事のために蓄えられた、撫育方（馬関越荷方など）という役所でのお金であった。

洋式武器は、長崎で長州藩の名義で購入できなかつたために、薩摩藩の名義で購入した。

■ 尊王攘夷思想

尊皇攘夷とは、天皇を尊び、外国人を討つ、という考え方。

※中華思想＝中心が最も良いとする考え方。 東西南北は東夷・西戎・南蛮・北狄と表現され、東の国から来るは、「夷」で、夷を攘（はらう・うちはらう）から、攘夷となる。

当時、欧米列強の侵略に対する危機感がつのっていた。

■ 攘夷戦の後、奇兵隊の創立へ

文久3（1863）5月10日、関門海峡にアメリカのベンブローグ号が東から現れた。早速、幕府の「攘夷決行」をうけて、細江町の光明寺に集結した、中山忠光を当主と仰ぐ光明寺党（久坂玄瑞が率いた）が、藩の軍艦庚申丸で攻撃。以後、フランス・オランダの艦船へも順次攻撃。ところが、6月1日にはアメリカ、5日にはフランス軍艦が報復に襲来。前田地区は焼け野が原にされ、関門海峡は大混乱となった。

この大混乱をまとめる人物として、藩主は、高杉晋作を呼び出した。呼び出された高杉晋作は、上海で西洋の軍事力を見た経験から、日本の軍事力で対抗することは不可能と解し、いったんは、辞退したが、藩主からの要望であることから引き受けた。

■ 高杉晋作：下関に登場

高杉晋作は、文久3年（1863）6月6日に下関に到着。白石正一郎宅で奇兵隊を創設することになる。

創立の日については、6日、7日、8日説がある。

6日、東行奉君令。戌刻馬関着。御本陣白石正一郎方ニ投宿仕候…。「奇兵隊日記1」戌刻＝午後8時ころに着く

7日、藩に次のような内容の上申書を出している。(河上弥一が届け出る)

一、奇兵隊の義は有志の者相集い候につき、陪臣(また家来)・雑卒(雑兵)・藩士を撰ばず、同様に相交わり、もっぱら力量をば貴び、堅固の隊相調え申すべしと存じ奉り候。

一、この後御伺い申し上げべきかどは、書面をば、前田孫右衛門まで差し出し申すべく候間 直々に御前へ差し出され候よう願ひ奉り候。

一、奇兵隊人数、日々相加り候につき、これまで小銃隊の内もこれあり、又は小吏相勤め候者もこれあり候、御一手(正規軍)人数の内もこれあるべく候えども、畢竟匹夫も志奪うべからず候えども、これらも拒み難き趣にござ候。もとより御組立(正規軍)の人数内をこれより相招きは仕らず候えども、自然奇兵隊望み参り候は、隊中へ相加え申すべしと存じ奉り候。

一、この往(さ)き毎合戦銘々勇怯も相頭れ申すべきにつき、日記つぶさに相調えおき差し出すべく候間、賞罰の沙汰陪臣・軽卒・藩士に拘わらず、速かに相行われ候よう仕りたく存じ奉り候。

一、隊法の儀は和流西洋流に拘らず、おのおの得物をもって接戦仕り候事。

※隊構成の重点を武士階級におくものの、「陪臣・軽卒・藩士を撰ばず、同様に相交り」とあるように、武士階級内部の封建的身分差別にかかわらず、もっぱら個人の「力量を貴ぶ」こととし、かつ武士階級に限らず志があれば入隊を許すとした点で、従来の藩庁正規軍の性格と枠組みとを破る新式軍隊を創出したもの。

しかし、そこでは武士階級内の門閥や家格差別は無視され、庶民も入れたが、袖印は諸士と足軽以下とを白絹地と晒布とで区別し、その書き入れも名字御免の者とそうでない者とを区別したように、士庶との区別は明確にあった。

※身分制を廃止した奇兵隊は、日本ではじめて誕生した近代的な軍隊であった。藩主直属の部隊で隊長が自由に隊を動かすことができた。ということは、臨機応変に兵力を移動させることができた。

7日に、奇兵隊の法令を作成。

1条 隊員は、命令を伍長から受け、伍長は総督の命令を、そのまま隊員に伝えなければならない。一つの隊は、全員が心を一つにすることが非常に大切。

2条 陣においては、勝手な外出は禁止する。かりに、思いがけないときに集合令がだされ、そこに集まることの出来ないものがあるならば、その者は不覚者(思慮なき臆病者)である。

3条 酒盛り、遊里行き、みだらな行い、高い声で騒ぐことを禁止する。

4条 喧嘩・口論・まったく意味のない無駄話は禁止する。もし作戦上の意見の申し立てがある時は、伍長を経て総督に申し出ること。

5条 陣中において、敵味方の強い弱いという批評をすることは禁止する。

8日、『白石正一郎日記』高杉当家にて奇兵隊取立相成正一郎廉作井石綱右エ門山本孝兵衛など入隊、昼高杉其外船にて台場見分萩役人より中山公子御滞在の御挨拶として金六十両頂戴す。さつまより聞合して重野厚之丞川治正之進兩人来着酒店の二階にて高杉相对しさつの両士今夜大里迄帰省。

■奇兵隊の編成

高杉晋作が新軍の編成を考えたのは、松下村塾へ通っていた時代の安政5(1858)年に、吉田松陰が

西洋の節制ある歩兵制の採用を説き、主として足軽以下農兵をあてるべきとし、孫子の「兵は正を以て合い、奇を以て勝つ」の一句を合戦の不変の原理とした『西洋歩兵論』や横井小楠の土隊の西洋銃隊化を説いた『兵法問答集』などを、すでに理解していたことがあげられる。

加えて、高杉晋作は、文久2（1862）年、上海へ渡海したことにより、西洋銃隊の強さを実体験し、さらに貧しい農民が加わった太平天国軍の進撃ぶりを知っていたことが大きく反映されている。

一つの号令で統制のとれた行動がとりがたい門閥身分制度の武士による隊よりも、むしろ身分差別のない、規律制度のとれる庶民の隊の方が、銃や砲を中心とした近代戦に適合するという、軍隊の進んだ流れをつかんだことが、一般庶民を参加させるという奇兵隊の編成の根幹にあったのである。

奇兵隊の歴史的意義

当時は、攘夷を実行したことに対して、外国の報復・来襲に備え、沿岸防備のために、ともかく兵力数を増加することが不可欠であった。そのため、農民をもって補充しなければならないとしていたように、庶民一般にも武装を許すという、封建支配のもとでは異例な非常手段をとらざるを得なかったところに、藩が奇兵隊の編成を許した所以がある。こののち、多くの諸隊、農兵隊の成立の道を切り拓くことになった。

入隊者が増える

奇兵隊は、足軽以下の者であっても、総督より願い出があれば、入隊中は士列に仰せつけられ、乗馬も許された。したがって、志を抱きながら、門閥身分制度のもとに、その志を伸ばすことができず、うつうつとしていた志士たちが入隊した。

『奇兵隊日記』には、6月7日「この日奇兵隊入十五人あり」八日には光明寺党（下関の光明寺を本拠とした）に滝弥太郎・赤根武人らも山口か来て加わり、『白石正一郎日記』の6月10日の条には「今日までに奇兵隊およそ六十余人出来」と記されている。

光明寺党は、藩が攘夷期限の切迫を前に馬関（下関）の防備に専念し、毛利能登を総奉行に任命し、4月26日には、京都に派遣中の久坂玄瑞など30人を敵情探索御用として馬関に遣わした。久坂玄瑞は、同志とともに攘夷を目指して長州藩に投じた侍従の中山忠光を一隊の首領に奉じ、下関（細江町）の光明寺に本営を置いていた。これが、奇兵隊の基盤となった。

■白石正一郎の功績

こうして隊の編成は次第にととのっていった。白石正一郎は弟の廉作とともに8日に入隊し、奇兵隊の会計方を担当し、資金面でおおいに支援した。そのため、高杉晋作は、白石正一郎の処遇を藩に申請し、7月3日、竹崎御殿で正一郎と廉作は藩主から直接に「勤王の義兼々心妙」と褒詞（おほめの言葉）を受け、五日、山口藩庁は白石正一郎に対し、扶持方2人・米3石2斗、高17石の三十人通（どおり）の普代の士の待遇を与えた。

■奇兵隊の旗

奇兵隊の旗として、「忠義墳骨髄」（ちゅうぎこつずいにしずむ）と、「菅原大神」の二つがある。

「忠義墳骨髄」は、三条実美に大書してもらったものである。藤田東湖の『回天詩史』にあるもので、高

杉晋作の好んだ言葉である。

「菅原大神」は、清末藩主毛利元純の書いたもの。高杉晋作は、天神さまを信仰し、梅の花を愛していたことによるものである。

■「諭示」が奇兵隊の精神

「諭示」は、椋梨藤太を中心とする俗論派政府が幕府に恭順的態度を示すため、正義派を逮捕追放した政策の一環として元治1（1864）年10月21日に諸隊の各総管を萩に召集し、諸隊の解散令を出したが、徳地の奇兵隊はこの命令を拒否し、隊員規則を定め、内部結束を固めるために隊員に示した心得である。これは、諸隊にも通知され、諸隊の諭示ともなった。

奇兵隊が結成されて1年4か月が経過した時点であるが、奇兵隊にとって、最もその精神が現れているものである。

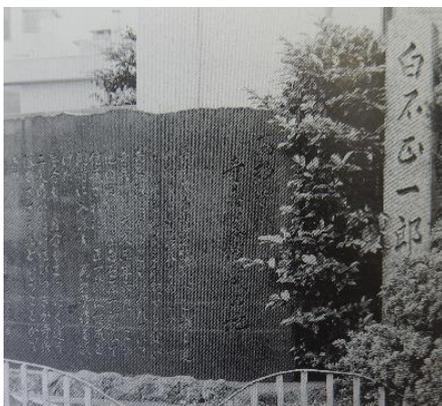
- 一、礼讓^{じょうじやう}を本とし士民の心を得る事肝要たるべく候。
- 一、農家へ猥^{みだ}りに立ち寄るべからず。農業の妨^{ていねい}少しも致すまじく候事。
- 一、言葉等叮嚀^{ていねい}に取あつかひ、いかつかましき儀これなき様致すべく候事。
- 一、牛馬往来の節は、道^{すみやか}べりによけ速^{すみやか}に通行いたさせ申すべく候事。
- 一、田畑たとひ植つけこれなき処にてもふみあらずまじき事。
- 一、山林の竹木、櫨^{はげ}、楡^{こうぞ}等は勿論、道^{すみやか}べりの草木をも伐^{きり}取るべからざる事。
- 一、郷勇隊の者は、自^{まか}から撃劍場へ罷^いり出、農家の小兒は学校へも参り教をうけ候様なづけ申すべく候事。
- 一、隊中一団の正気を拡充いたし候間、人心をとり候外これなく、人心をとり候はば銘々躬行を宗とし、自ら感服いたし見習候様これありたき事。 十月十九日

■『奇兵隊日記』の保存

1、 尊攘堂本

『奇兵隊日記』の原本は、現在は、京都大学付属図書館に所蔵されているが、当初は品川弥二郎が（1830～1859）松下村塾に関する資料を集め、保存したことに始まる。品川弥二郎が没後、京都帝国大学に寄贈されたもの。

- 2、 『奇兵隊日記』はこの原本の写本が山口県文書館毛利家文庫所蔵、東京大学史料編纂所所蔵などがあり、一般的には、1932年日本史籍協会刊行（4冊）、1986年復刻本がある。



(奇兵隊創設の地)



(奇兵隊隊士)

(次回は、3月17日<土>午後2時)

